

令和 3 年度 プロジェクト研究評価報告

プロジェクト研究課題名	地域農業・農村社会の構造変化を踏まえた農業経営の改善・農村コミュニティの維持・活性化に関する研究
研究実施期間	令和 3 年度～令和 5 年度
プロジェクト研究の概要	令和 2 年 3 月に策定された新たな食料・農業・農村基本計画においては、平成から令和へと時代が変わる中、かつてない少子高齢化・人口減少の波が押し寄せ、その影響が都市部よりも地方に顕著に現れており、すでに一部では産業や地域社会の衰退が現実のものになりつつあるという現状認識が示された。その中では、農業・農村についても、農業就業者数や農地面積の減少が継続し、経営資源や農業技術が継承されず、生産基盤が一層脆弱化することが危惧されるとともに、農村人口の減少、地域コミュニティの維持が困難になることも懸念されている。 こうした情勢の中、同計画においては、人・農地プランによる地域農業の点検の加速化、担い手の育成確保、経営基盤の円滑な継承、農地の集積・集約化等の人・農地に関する対策の推進や、半農半 X 型の移住志向等に見られる田園回帰の流れも踏まえ、農村を維持・活性化するための地域政策の総合化等を打ち出している。 近年の農業・農村の動きに目を転じると、例えば集落営農組織の法人化進展に関する地域間格差の存在や、中山間地域における主たる農業従事者の高齢化の過度な進展、農業雇用者に関しては、特に若年層の雇用者数の伸びの鈍化等の傾向がうかがえるが、同計画の着実な実施のためには、まずは最新のデータに基づく現状分析が必要不可欠であり、2020 年農林業センサスの分析を個票の組替集計も行いつつ詳細に実施する。当該結果を踏まえ、地域農業や農村社会の構造的な変化が特徴的な地域、抱えている課題が顕著になりつつある地域を選定して実態調査を行い、そのような動きが起きている要因と問題点を明らかにし、農業経営の改善・持続性の確保、農村コミュニティの維持・活性化につながる対策のあり方を提示していく必要がある。 (小課題 1) センサス分析による農業・農村の構造変動の解明に関する研究

	農業の担い手、農業労働力、農地の有効活用・管理、農村コミュニティの維持・活性化等をめぐる地域農業や農村社会の構造的な変化を、2020年農業センサスの結果を用いた総合的な分析から明らかにする。 （小課題2）農業経営の改善・持続性の確保に関する研究 担い手が規模拡大し経営を改善していくために必要な労働力をどのように確保しようとしているのか、統計分析及び現地調査を組み合わせ、今後の見通しを含めた課題把握を行い、対応方向を明らかにする。 また、経営改善に資する農地の利用を促進するため、農地集約度を測る指標を確立し生産の効率性等を分析する。 さらに、集落営農の経営の持続性の確保のための課題と対応方向を、アンケート調査の分析等により明らかにする。 （小課題3）農山村地域における集落及び地域資源の維持・管理に関する研究 集落の縮小や高齢化によって存続が危惧される集落等における集落機能の変容過程や農林地をはじめとする地域資源の保全管理状況の実態把握から、集落の存続と地域資源管理に関する課題を明らかにする。 また、荒廃農地対策の検討に資するため、遊休荒廃農地の発生状況の地域性や発生要因に関する分析を実施する。 さらに、中山間地域で集落営農や市町村農業公社等による農業支援が行われることで、農業にとどまらず当該地域での生活そのものの維持につながっている事例を調査し、その要因を明らかにする。
評 価 結 果 ○評価会議名及び開催日 「地域農業・農村社会の構造変化を踏まえた農業経営の改善・農村コミュニティの維持・活性化に関する研究」プロジェクト研究評価委員会 令和4年3月15日開催 ○ 評価委員名	（小課題1）センサス分析による農業・農村の構造変動の解明に関する研究 【評価項目ごとの評価】（ ）内は3名の委員の投票数を示す。 ○社会的ニーズへの対応 S:非常に大きな意義がある（3） ○政策の企画・立案への貢献 S:非常に大きな貢献が見込める（1） A:大きな貢献が見込める（2） ○学術面からみた研究成果の評価 A:学術的に高く評価できる（3）

荒井 聡 委員 (福島大学農学群食農学 類 教授) 小林 剛 委員 (山口県山口農林水産事 務所 農業部長) 橋口 卓也 委員 (明治大学農学部 教授) ○評価基準 ・ 社会的ニーズへの対応 S:非常に大きな意義が ある A:大きな意義がある B:意義がある C:意義が小さい D:意義は見出しがたい ・ 政策の企画・立案への 貢献 S:非常に大きな貢献が 見込める A:大きな貢献が見込め る B:貢献が見込める C:貢献は小さい D:貢献は見込みがたい ・ 学術面からみた研究成 果の評価 S:学術的に非常に高く 評価できる A:学術的に高く評価で きる B:学術的に評価できる C:学術的な評価はやや 低い D:学術的な評価は低い ・ 研究計画の妥当性 S:非常に良い A:妥当である	○研究計画の妥当性 A:妥当である (3) ○研究資源・実施体制の妥当性 S:非常に良い (1) A:妥当である (2) ○研究目標の達成度 A:達成度は高い (2) B:概ね達成している (1) 【総合評価】 () 内は3名の委員の投票数を示す。 1:順調に進行しており、問題はない (3) 【評価委員からの主な意見】 ○我が国の最も基幹となる農業統計である農業センサ ス分析は、いわゆる昭和一桁世代の本格的リタイア が終わった後の、日本農業の大きな構造変動を把握 する分析になるものとして大変注目される。また、こ の間の政策変化と農業構造への影響など、行政的に も期待されるものがある。農林水産政策研究所なら ではの組織力や、データアクセスへの機動性などを 活かして、総合的な分析がなされれば、大いなる成果 があがるものと考えられる。 ○「農業経営の改善・持続性の確保」等の他の小課題に も目配りし、分析を進められたい。またプロジェクト 研究課題には「農村コミュニティの維持・活性化」に も触れられているので、その分野の研究も期待して いる。 ○2020 年センサスでは、団体経営など調査項目がいく つか変更されており、統計の継続性に留意され、構造 変動の特徴をわかりやすく論述していただきたい。 ○研究成果の公表については早め早めをお願いした い。なお、その際には優良事例の提供や今後の示唆を お願いしたい。 (小課題2) 農業経営の改善・持続性の確保に関する研 究 【評価項目ごとの評価】 () 内は3名の委員の投票数 を示す。 ○社会的ニーズへの対応 S:非常に大きな意義がある (1) A:大きな意義がある (2) ○政策の企画・立案への貢献
--	---

B:概ね妥当である C:やや妥当でない D:妥当ではない ・研究資源・実施体制の妥当性 S:非常に良い A:妥当である B:概ね妥当である C:やや妥当でない D:妥当ではない ・研究目標の達成度 S:達成度は非常に高い A:達成度は高い B:概ね達成している C:達成度はやや低い D:達成度は低い ・総合評価 1.順調に進行しており、問題はない 2.ほぼ順調であるが、改善の余地がある 3.計画等を変更する必要がある 4.中止すべきである	A:大きな貢献が見込める（3） ○学術面からみた研究成果の評価 A:学術的に高く評価できる（3） ○研究計画の妥当性 A:妥当である（3） ○研究資源・実施体制の妥当性 A:妥当である（3） ○研究目標の達成度 A:達成度は高い（2） B:概ね達成している（1） 【総合評価】（ ）内は3名の委員の投票数を示す。 1:順調に進行しており、問題はない（3） 【評価委員からの主な意見】 ○日本農業の脆弱化と担い手の高齢化などが危惧される中で、農業経営の現状を把握し今後の持続性を見通すとともに、担い手への支援策などの政策課題を抽出する上でも、大変重要かつ貴重な研究内容である。 ○農業経営改善に資する農地集約度測定指標を確立していくことは、農地政策等の企画・立案への大きな貢献が見込める。 ○本研究により、雇用労働力の確保、農業ボランティア、最適な農地集積、経営体をサポートする集落営農の分析が進むことにより、来年度に法制化される人・農地プランの作成に活用できることを期待する。 ○「センサス分析による農業・農村の構造変動」での論点に留意しつつ研究を進められたい。 ○配置されている7名の研究員の農業統計分析、アンケート分析、現地実態調査の役割分担体制を明示するなどして、いっそう研究体制を明確化して進められたい。 （小課題3）農山村地域における集落及び地域資源の維持・管理に関する研究 【評価項目ごとの評価】（ ）内は3名の委員の投票数を示す。 ○社会的ニーズへの対応 S:非常に大きな意義がある（1） A:大きな意義がある（2） ○政策の企画・立案への貢献
---	---

	S:非常に大きな貢献が見込める（１） A:大きな貢献が見込める（２） ○学術面からみた研究成果の評価 S:学術的に非常に高く評価できる（１） A:学術的に高く評価できる（１） B:学術的に評価できる（１） ○研究計画の妥当性 A:妥当である（３） ○研究資源・実施体制の妥当性 A:妥当である（３） ○研究目標の達成度 A:達成度は高い（１） B:概ね達成している（２） 【総合評価】（ ）内は３名の委員の投票数を示す。 1:順調に進行しており、問題はない（３） 【評価委員からの主な意見】 ○特に条件不利地域等、人口減少・高齢化が進み集落機能の低下が心配される地域で注目されうる、極めて重要な課題であると考えられ、それだけに現場の地域リーダーや行政担当者からも期待の大きい研究課題であろう。 ○農業公社に関する調査・分析は、これまでの当面の間は、対象としての位置づけが後退していたと思われるだけに、期待される。ただし、研究対象を適切に絞り込むなどの方向性が示されれば、研究課題との関係で、より適切に焦点化が図られるものと思われる。 ○荒廃農地の分析は、データ制約もあるかもしれないが、その点も踏まえた上での分析が期待される。山間地においては集落営農などの担い手も先細りとなっており市町村公社への期待が高まり、その役割・課題の整理は重要性を帯びている。統計・アンケート分析と現地実態調査と関連付けて研究を進められたい。また「センサス分析による農業・農村の構造変動」での論点に留意しつつ研究を進められたい。
今 後 の 対 応 方 針	（小課題１）センサス分析による農業・農村の構造変動の解明に関する研究 御指摘を踏まえ、統計の継続性に留意しつつ分析を進め、他の小課題の分析にも資するよう、今年度中に成果を取りまとめてプロ研資料を作成する。研究成果については、省内関係部局に対する報告とともに、学会誌等への論文投稿を進め、広く社会的に情報発信する。

	（小課題２）農業経営の改善・持続性の確保に関する研究 御指摘を踏まえ、小課題１の論点に留意しつつ、雇用労働力、農業ボランティア、集落営農等の分析を進める。また、行政サイドと連携を図りつつ、農地集約度を測る指標を確立し生産の効率性等の分析を進める。 （小課題３）農山村地域における集落及び地域資源の維持・管理に関する研究 御指摘を踏まえ、小課題１の論点に留意しつつ、荒廃農地の分析、さらには中山間直接支払いの実施状況と集落の行動の関係について分析を進める。また、市町村農業公社のアンケート結果を分析するとともに、これを踏まえて農地保全や農村活性化に積極的の取り組む公社が所在する自治体等での現地調査を実施する。
--	--